

## 畏友 岡崎守男先生を送る

濱 田 博 男

岡崎先生が2001年3月で定年を迎えられ退任される。定年の定めがあることはやむを得ないこととは知りながらも、心惜しまれる次第である。

岡崎先生は、私の知る限りでは、大阪大学法経学部（在学中は新聞会で活躍）を1953年にご卒業後、日本経済新聞社に経済部記者として9年間勤務された後、大阪証券経済研究所（現日本証券経済研究所）に移られて5年間、そして1967年に本学に着任され、爾来34年間にわたって本学のために努力を続けてこられた。この間、本学では経営学部長・大学評議員・大学自己評価委員長・計算機センター長などを勤められ、また学校法人桃山学院評議員ならびに理事の仕事をされ、他方で70年代、大学経営の厳しい時期（短大問題を含めて）に組合委員長を2期勤められた。

私と岡崎先生とのおつき合いは、顧みると大阪証券経済研究所で同僚として机を並べて以来であるから、40年近くにもなる。私は2年ほど早く同所に勤務していたが、その後大阪市立大学経済研究所に移ったので、机を並べたのは数年間であったが、そのごも同じ証券市場の研究者として、時期により多少の濃淡はあっても、親しくおつき合いしてきた。大阪市立大学経済研究所の産業研究グループの研究会にお誘いし長くご参加いただいた時期もあったし、証券経済学会（1966年創立）では幹事をお願いし長くご協力いただいた。

この間、岡崎先生と共編で『現代日本の証券市場』（1984年）、『日本の証券市場』（1990年）（いずれも有斐閣）を出版したが、共編とはいえ岡崎先生にメインとして作業をすすめていただいた。また、1984年に韓国証券学会の招

きでソウルでご報告いただくのに日本側の学会役員の一人として同行した。1993年には私の編著で『アジアの証券市場』（東京大学出版会）を出版したが、このときも研究会に参加していただくとともに調査旅行で一週間ほど台湾にご一緒したのも忘れられぬ思い出である。1994年4月、ご縁があつて私が本学経済学部に着任することとなり、学部こそ違え同じ大学の同僚としておつきあいすることとなった。研究所生活が長く学部教育に不慣れで、なにかと戸惑うことの多かった私にとって、北野田キャンパスの教員控え室で昼食をご一緒しながら岡崎先生からいろいろと親切なご教示をいただいたことは大変有り難かったと感謝している。そのさい感じたことは岡崎先生が学生の教育のためにずいぶん丁寧に努力されているということでもあつた。和泉キャンパスに移ってから出校日がほぼ同じで昼食・夕食をご一緒する機会も多く、また同じ共同研究グループに属していることから、学問上の問題も含めて何かと語り合い、教えていただくことが多かった。

岡崎先生は、理論と実証の両立を強く考え続けてこられた研究者であると思う。同先生のこれまでの研究業績から窺えることは、若い頃の日本経済新聞社記者時代に農業・石炭・繊維・鉄鋼・化学等の現業分野を担当され、産業論研究のベースを培われ、また商品・証券取引所を担当され「相場」についての知識を深められたことであり、それらが同先生の今日までのご研究の一つの重要なベースをなしていると思われることである。産業論と「擬制資本論」の融合を強く意識して努力されてきたと言いえるのではないか。理論面では、故川合一郎教授（大阪市立大学商学部）の『資本と信用』（1954年、有斐閣）、『株式価格形成の理論』（1960年、日本評論新社）に代表される研究の流れを汲まれてきたのは私も同様である。

特に印象深かったことの一つは、1964年頃から当時の証券市場の分析の結果として、そのころは証券界ではタブーとされてきた「株式恐慌」という表現を用いて論文を書かれ、そして証券経済学会創立大会（1966年）で「現代株式恐慌の機能と現代的特色」と題した報告をされたことである。そのごも川合一郎編『日本証券市場の構造分析』（1966年、有斐閣）のなかでの「戦後

日本の株式市場における株価形成とその特質」のほか、前掲の編著『現代日本の証券市場』、『日本の証券市場』にみられるように、ほぼ一貫して現実の産業界の動きをベースとしながら、日本の証券市場の構造分析と株式価格形成という難問に正面から取り組んでこられた。このことは証券経済学会でもきわめて高く評価されているところである。

岡崎先生のお人柄は、私の知る限り、どちらかといえば穏やかで控えめ・謙虚であるが、同時に自分の信ずる主張には頑固というか、かたくなな面もある。とくにいわゆる「弱者」への思い入れがつよいように思われる。

岡崎先生は1996年に、長年の最愛の奥様を病で亡くされた。当然のことながら暫くは落ち込んでおられ、近しい者は心配もしたが今では元気も取り戻されていることは嬉しい。クラシック音楽に造詣深く、またシャンソンも愉しまれ、そのほか囲碁にも練達の岡崎先生が、学問の研究継続は勿論のこととして、これからも心豊かな生活を過ごされることを心からお祈りする次第である。